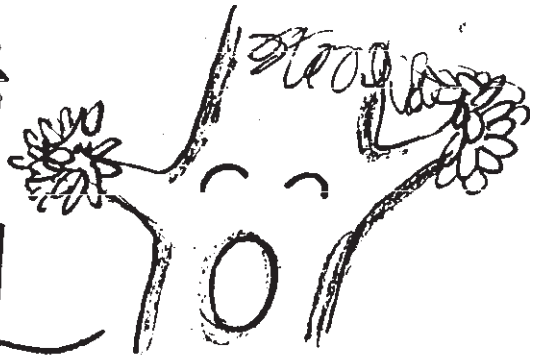




第34号



ECOMAIL '90

関西 ECOMAIL

関西支部会員のみなさまに、ワークショップのお知らせや環境教育に関わる情報の交換をしていただくために発行しています。

また、学会員以外の方々と、環境教育に関心をもっておられる方や実践をされている方とのコミュニケーションを広く図りたいと思っています。

日本環境教育学会会員のみなさまには支部会費、会員でない方には購読費として、年間1500円をいただきましたら、ワークショップの案内とこの関西 ECOMAILを送らせていただきます。

(通信費振り込み先: 日本環境教育学会 関西支部 郵便振替口座

00990-5-37886)

第53回 関西ワークショップのお知らせ

日時 1996年11月9日(土) 14:30~17:00

会場 大阪教育大学天王寺キャンパス

本館1階南側S4教室(予定、当日会場内に掲示します)

(JR大阪環状線 寺田町駅下車、南出口を西へ徒歩3分)

話題提供者 内山裕之氏(神戸大学附属住吉中学校)

テーマ 「中学校選択理科における環境教育の実践」

—イノシシの餌付けは是か非か—

(内山先生は中学1~3年生を対象に毎週六甲山でフィールドワークをされており、それをもとにした自由研究についてお話しいただけると幸いです)



ワークショップ終了後、同会場内にて世話人会を予定しています。

第34号 目次

- ・第52回 関西ワークショップ(9/14)
「吹田市資源リサイクルセンター」見学報告 (堀田 敦子) ... 2
- ・連載企画<阪神・淡路発!被災地は今>
「雑感 震災を忘却の彼方へとしないために」(藤川隆一郎) ... 3
- ・第51回 関西ワークショップ(7/6)
「日中合同環境教育シンポジウム参加報告」
(植田善太郎、井田和子) ... 4~6
- ・1994年11月ワークショップ報告 (本庄 眞) ... 7
- ・日本環境教育学会関西支部第5回研究大会のお知らせ ... 8

〔第52回 ワークショップ〕
吹田市資源リサイクルセンター・見学報告

平成8年9月14日（土）、吹田市資源リサイクルセンターを見学しました。

●吹田市資源リサイクルセンターの概要

吹田市資源リサイクルセンターは、平成4年10月に完成しました。このセンターの特徴は、単に「ごみを処理する施設」だけではなく、ごみ問題やリサイクルに関して、市民の皆さんに関心を持ってもらうために、「市民工房」や「講座事業」、「研究事業」を行っている点にあります。このため、建物は5階建てで、1階から3階が吹田市直営の破砕選別工場、4階から5階は財団法人千里リサイクルプラザがさまざまな事業を行っています。

●吹田市のごみの収集方法

吹田市では、ごみを、「燃焼ごみ」「資源ごみ」「大型複雑ごみ」「小型複雑ごみ」「有害危険ごみ」と5つに別けて排出します。このうちの「燃焼ごみ」以外の4つが「破砕選別工場」に運ばれてきます。見学では、運ばれてきたごみが、次々と「破砕機」に運ばれるところを見学しました。最新の設備を備えた工場といえど、布団のマットレスは一つずつ人手で分解されています。「一番の分別は人の手」と市の担当の方（千里リサイクルプラザ・小山美子業務課長）も話されていました。アルミ缶とスチール缶の選別ラインでは、スーパーの袋などに缶や瓶と一緒に混ぜた袋を処理する作業員の姿がありました。「自分一人くらいなら大丈夫」という自分勝手な行動が誰かに負担をかけているのです。

●生活にリサイクルの知恵を

「市民工房」は、リサイクルの方法を学ぶ場所として設けられています。現在、自転車や家電製品、衣服のリフォーム、ガラス作品など、6つの工房があります。この日は、「牛乳パックからの紙すき」も体験できました。「講座事業」は、9月21日から、6回連続講座「ごみと地球環境」が始まります。「研究事業」とは、大学・市民（広い意味での）・行政が一体となって、あるテーマのもとに研究を進めるものです。希望者は、誰でも「市民研究員」に参加できます。

●環境教育の場としてのセンターの役割

リサイクルを考える時、ごみとして排出されるものを対象にするだけではなく、広く社会システムの流れの中で、ごみの減量やリサイクルを考える視点が必要です。しかし、日常の中で、どのようにこれらの問題をとらえていくか、センターはその役割を担っていると言えるでしょう。現在、財団では、「市民工房」の出前講座のようなことも検討中だそうです。市域の中に、その輪が広がっていくことを願ってやみません。

〔吹田市資源リサイクルセンター：☎06（877）5300

〒565 吹田市千里万博公園4-3〕

（文責：堀田 敦子）

あの忌まわしい大震災から1年半が過ぎました。被災者の方々は、2度目の暑い夏を過ごし、厳しい冬をまた迎えようとしています。町では復興が進んでいるとは言え、人口の減、職場の減、観光客の減等々、まだまだ旧に復したとは言えない状況です。確かに、町中を歩いてみると、三宮周辺では新しいビルが建設中で、解体が終わったところもフェンスが作られ震災の爪痕は消え、それなりの賑わいも戻ってきています。住宅地でも更地に新しい建物が立ちはじめています。しかし、郊外のニュータウンなどにある仮設住宅が解消されるには、どれくらいの時間がかかるのでしょうか。被災者の生活などソフト面での復興が、あまり見えてこない一方で、東部副都心の整備、発電所の計画、そして高速道路の復興など、ハード面での復興（復旧？）は、着々と進んでいるように見えます。少数？になりつつある被災者の様子が、大都市の力強いが得体の知れない動きの中に埋没していくようです。

さて、わが身に振り返ってみれば、普段の暮らしに震災の影響をほとんど見ることなく、仕事での震災のことと言えば、先日、平成7年度の環境の状況を公表したところですが、大気汚染・水質汚濁については、震災による影響はほぼなくなり、良くも悪くも震災前の状況に戻ってきました。震災当初のダイオキシン、アスベスト、粉じんの問題なども、対策の実施、建物解体の進捗とともに平常の値へと下がってきています。その一方、騒音や振動などの苦情は相変わらずですが。

果たして、今回の大震災による様々な教訓が、どの様にまとめられ、生かされていくのか。危機管理のあり方や防災計画の見直しなど、国でも地方自治体でも議論されていますが、「地方分権」や「市民参加」が盛んに言われる中、今回の震災では、市民の役割、地域コミュニティの役割が防災上非常に重要な要素であることが確認できました。行政だけでなく市民一人ひとりのきっちりとした反省と評価が必要です。ただ、行政の役割の大きさは否定するものではありませんが、結果として食いつまらない報告としてまとめられることになる（と思われませんが）のは、行政に対する大きすぎて多すぎるくらい様々な期待（というよりも要求）があり、官と民との対等で責任ある関係が、日本ではまだ成熟していないからだと思います。実は「ワークショップを学ぼう」と題する職員対象の防災まちづくり研修が始まり、私も参加しているのですが、このような学習手法が、学校教育や、社会教育にもっと取り入れられることが必要だと痛感します。

最後に、環境教育に関する動きでは、学校教育での防災教育の必要性が叫ばれる中で、環境教育についても具体的な取り組みが始まっています。小中学校の理科の先生方の研究部に環境教育の部会ができ、全市の生き物調査や学校ビオトープ作りなどがスターとしています。これらの活動には職員有志でつくっている神戸エコアップ研究会が協力しています。私も現在は大気汚染防止の仕事に変わりましたが、同研究会のメンバーとして関わりを持っています。環境教育が広く進められることは、防災の基礎づくりと考えていますので、これからも自分にできることは、積極的に進めていきたいと思っています。



第51回関西ワークショップの報告（96. 7. 6. 天王寺キャンパスにて）

この号では、話題提供した3人の方より、植田と大阪女子大の井田さんの報告を掲載します。井田さんの原稿は、前の号発行以前に送っていただいたのですが、誌面の都合で掲載できませんでした、お許しください。



日中合同環境教育シンポジウムに参加して

植田善太郎（泉大津市立条東小学校）

今年、3月12日から18日の1週間、中国北京の町並みや人々の生活の様子を少しだけ見れたような気がする。特に環境教育の視点を押さえたような北京滞在であったのだろう。そして、この度は関西支部のご要望に答えて、今回の北京ツアーで親しくなった井田さん（大阪女子大）村上さん（住吉中学・当時は大阪教育大学 鈴木研の研究生）にも応援をお願いして、無事「報告会」を終えた。これも、参加者一人一人のお人柄のお陰で、話題提供者全員、感謝しております。司会の本庄さんには、いくら5年前に訪中調査を行っていたとはいえ、いろいろ気を使わせて誠に感謝しています。（謝謝太謝）

さて、私にとっても、訪中はまる11年ぶり、それに前回のツアーは広州と桂林、香港だったこともあり、北京での滞在は、少しばかり緊張と不安それに好奇心がないまぜになっていたように感じる。

中国の旅は、北京市内観光からはじまった。故宮（紫禁城）の見学は「中国4000年」を感じさせる造りや展示物になっていた。200万人が立って参加することができるという200万㎡もある天安門広場に立って、毛沢東元主席の肖像と「世界人民大連帯 中国共産党万歳」の赤い看板を見ると「中国やなー！」と感じたのはわたしだけだろうか。14日～16日のシンポジウムでは、日中両国の環境教育に対する相違点をふまえて今後の両国の環境教育でのつながりかたを追求する歴史的な第一歩であったように感じる。「日本語に大阪弁ありき」を中国の人に知らせたのは何をかくそうこの私である。実にいい思い出になった。

コーディネーターを務める鈴木先生から「国語教育に環境教育を取り入れた実践」について意見を求められた。元来チョカ（おっちょこちょいを大阪弁で

はこういう)の私は「ニーハオ」とはじめてしまった。その後、少しぐらいの中国語がはなせたら良かったのだが、なにせあいさつの「ニーハオ」「ツァイディエン(再見)(ツァイフェイ(再会)でもいい)」ぐらいの語学力である

大学の1, 2回生で中国語の講義をうけただけだ。出発前に、『中国語が24日で身につく本』(紹文周著)と別売カセットを購入して17年前にとったきね柄で一夜漬けの中国語を頼りに北京にやって来ただけである。あとは、ベタベタの大阪弁で自分の実践の概要を述べた。同時通訳が入るので1センテンスぐらいで発言を切らなければならない。初めての経験でなかなか思うように言葉が出てこない。まして私は、自分が使っている言葉「大阪弁」が標準語だと思っている。今までに発言された日本の先生方は多分きれいな?共通語。本来なら日本側の発言間にも通訳が必要なくらい?である。日中間の通訳はセンターのフ氏。私が「土」といった言葉の通訳の時、私の方をみて首を傾げられた。言い換えて「土壌」と言うと余計に複雑な表情。私は一瞬次にどう言い換えようかと迷ったが、コーディネーター氏の言葉でイントネーションの違いによるものと察知して「私の言葉はターパンファ(大阪話)(日本語のことをリーベンファ(日本語)ということがあるので)ですので…」とごまかした。このときばかりは頭の中が真っ白になった。でも発言をおえ、シンポが終わって日中の懇親会の時に中国の金先生から「あなたのおかげで日本にも別の言葉があることを初めて知りました」と声をかけて頂いた。言葉の真意は別にして環境教育の中国の大先生から声をかけていただいたことがいい思い出に残る。

中国人はイントネーションに敏感な国民だと思う。漢字の読み方に四声という4つの抑揚パターンがある。逆に日本人は抑揚には鈍感な国民ではないだろうか。イントネーションとアクセントのちがいはっきりしない大人がたくさんいるのではないだろうか。

最後に私見を述べる。今回のシンポジウムでは中国側参加者に日本語が堪能な方が多かったのに対して、日本側の参加者には中国語の理解者が少なかったようだ。私の「中国語が24日で…」の威力の方も残念ながら大して役に立たなかった。今後は、お互いの国の言葉をもっと理解して、学校でも国際理解には相手の母国語を予習することから始める必要があると思う。環境教育における国際理解の必要性を感じたシンポジウムであった。

〔日本の工業化過程と公害〕

公害という行政用語は，明治期の工業化過程における工場周辺での水汚染，大気汚染，ばい煙，騒音，振動などの被害の広がりによって，生まれたものである。

明治期の典型的な大規模公害は，足尾銅山鉍毒事件である。鉍山の廃棄物の川への放流は，渡良瀬川の魚類の大量死や農作物に被害をもたらした。毒性の強い煙は，山林の枯死と表土の流失となり，洪水により被害が拡大した。

地元選出の野党代議士の田中正造は，一貫して農民の指導者となった。農民の非暴力抵抗運動と生活を支援し，それに奉仕した。鉍毒反対運動の途上で議員活動に見切りをつけて辞職し，河川水源地と洪水被害の調査旅行の途上病死（1913）するまで，20余年にわたる鉍毒反対運動をおこなった。

田中の晩年は，高い次元の自然保護思想に到達していた。自然の法則の中に生きる人間の自治が，政治の究極の目標であると考えるに至った。今日になって，エコロジー思想の先駆者として理解されるようになった。

渡良瀬川上流の足尾鉍山跡の現地と下流の旧谷中村の遊水池の現在の状況は，100年を経てなお鉍毒の被害がほとんど回復していない。一旦起こった公害の被害は不可逆的であり，被害の予防，およびその早期発見による対策の重要性をわれわれに教示している。

日本の敗戦後は，工場や鉍山で生産が再開された。1950年代には富山県のイタイイタイ病，岡山県を中心にした森永ひ素ミルク中毒，熊本県の水俣病がある。

1960年代には，石油化学を中心としたコンビナートが主流となり，四日市喘息，新潟県で水俣病が再発し，公害は全国的な問題となる。

1970年代になると自動車廃ガス中の鉛による中毒，光化学スモッグの発生で，公害が辺境の貧困層だけのものだけでなく，都市の中産階級にとっても身近な問題となる。汚染物質に有機塩素化合物やフッ素化合物などの自然界で分解しにくい物質が加わった。

1980年代は，ホテル，ゴルフ場，スキー場かマリーナ計画で，森林の伐採と地形の改変，人工的に造られた芝生に大量の農薬をまくなどの環境破壊，水田の減反とあいまって，日本の水循環の安定性は大きく損なわれたと予測される。

宇井 純 沖縄大学教授

水俣病の研究者。1970年から15年間，東京大学内で公害原論の自主講座を開講した。公害を始めとする環境破壊の発生のメカニズムを一般に知らせ，あわせて研究者と住民運動関係者，さらに学生や一般市民などの参加者と共同討議を行うことを目的とした。（環境科学辞典，東京化学同人，p236，1985. より）

1994年11月ワークショップ報告

— 人間と自然の長いつきあいから生まれた景観に学ぶ —

本庄 眞（奈良環境教育研究会）

今回の企画の目的

- ・ 環境民俗学研究会あるいは、自然文化誌研究会に向けての一つの準備。
- ・ 1994年5月の第6回環境教育学会フィールドワークショップの試みを広げ、実践する。

場所：奈良県大和郡山市矢田丘陵（旧矢田村を歩く）

観察した場所：寺、墓、池など

講師：浦西 勉さん（奈良県民俗博物館学主任委員）

参加者の感想を一部掲載します。

〔赤松 良彦さん（兵庫県三田市）の感想〕

国定公園の自然との橋渡しの役割を果たすレンジャーのボランティア活動を行っている私は今回の研究会で古くからの人と自然との接し方を改めて見直すことができました。人間をとりまく自然との調和がかってのように密接ではなくなった現在、今もなお古くからの社寺林などが残る環境は今に受け継がれるべき貴重な存在であると実感しました。

〔山本 正憲さん（大阪市）の感想〕

毎日新聞で環境教育学会関西支部ワークショップの案内記事に興味をいただき、ふらり妻と二人で民俗博物館にやってきました。

私は、大阪近郊の山々を中心として登山・軽い沢の登りを続けております。近年、山そのものや里山と呼ばれる周辺部の荒廃の進行を目のあたりにして、一登山者としても“何かできることはないのか”との想いが次第に強くなってまいりました。

矢田村のような都市近郊部で民俗的な資料が数多く残っていることに驚くと共に、自分としては里山の自然と調和した人々の生活が満ちてゆけば、裏山・森の存続も危うくなるとの想いを一層強くしました。

「人の手が加わった自然保護」ということを身近に感じることでできた一日でした。

（報告が大変遅れたことお詫びします。）



12/15 日本環境教育学会関西支部第5回研究大会

「震災体験と人々の意識変革—人と自然の共生をめざして—」

日本環境教育学会関西支部では、次のように第5回研究大会をおこないます。会員の皆様の発表とご参加をお待ちしています。

大会実行委員長 赤尾整志（関西支部長）

プログラム

- 9:30 受付開始
10:00 第1部：一般研究報告、2分科会
A会場「災害と環境教育」
B会場「一般報告」
11:30 関西支部総会
12:00 昼食
13:00 第2部：テーマ「震災体験と人々の意識変革—人と自然の共生をめざして—」
あいさつ 沼田 眞 氏（日本環境教育学会・学会長）
13:20 基調講演 中川米造氏（大阪大学・名誉教授）「災害と人間の行動」
14:20 シンポジウム
パネリスト：田中眞吾（神戸大学名誉教授）「自然環境と震災」、辰巳武宏氏（神戸市立御影小学校）「震災体験と小学生の意識変化」、古川英治氏（淡路島北淡西中学校）「震災体験と中学生の意識変化」、木内 功 氏（大阪府青少年活動財団・総務主任）「ボランティア活動としての環境教育」、谷口文章氏（甲南大学）「心的外傷を契機とした『人と自然の共生』への自覚」
コーディネーター：鈴木善次氏（大阪教育大学）
17:00 閉会

- 日 時：1996年12月15日（日）9:30～17:00
○会 場：神戸国際会議場（ポートアイランド）
○主 催：日本環境教育学会関西支部
○定 員：360名
○資料代：1,000円（学生500円）
○申し込み：一般研究発表の希望者は実行委員会事務局まで直接お申し込み下さい。
○お問い合わせ先：関西支部第5回研究大会実行委員会事務局
〒582 柏原市旭ヶ丘4丁目698-1 大阪教育大学 環境科学教育研究室
TEL・FAX 0729-78-3381



当日は、日本環境教育学会及び文部省主催の公開シンポジウムと同じ内容で開催されます。尚、前日の12/14は甲南大学において 国際シンポジウム「環境倫理と環境教育—人と自然の共生をめざして—」が開催されます。あわせてご参加ください。

関西ECOMAIL

第34号 1996年10月30日発行

編集 日本環境教育学会 関西支部 世話人会 広報委員会

発行 日本環境教育学会 関西支部

事務局 大阪教育大学 環境科学教育研究室(鈴木善次研究室) 発行

〒582 柏原市旭ヶ丘4丁目698-1 (TEL&FAX 0729-78-3381[直通])

次回 第34号 1996年12月25日発行予定 原稿必着期限12月20日

(原稿は広報委員の植田善太郎まで、直接郵送かFAXしていただく方が早く記事になります)

〒592 堺市浜寺石津町東2-3-35 TEL&FAX: 0722-47-2751)